

平成24年度卒業式 学長式辞

愛媛大学長 柳澤 康信

例年より早く桜が開花し、いままさに満開を迎えようとしている今日、1,881名の皆さんに学位記を授与いたしました。卒業される皆さんに心からお祝いを申し上げます。「おめでとう。」

本日の式典には、先ほど紹介させていただきましたように、各界を代表する方々、そして愛媛大学にゆかりの深い諸先輩に来賓としてご臨席を賜りました。お忙しい中、ご臨席いただいたことに厚くお礼を申し上げます。また、本式典にご出席のご家族、関係の皆様に対して、心よりお慶びを申し上げますとともに、日頃から本学に対するご理解・ご支援に対して、この場を借りて深く感謝申し上げます。

卒業される皆さんは、在学期間中にそれぞれいろいろな困難や苦労があったことと思います。それを克服して今日の佳き日を迎えるに至った努力を讃えたいと思います。皆さんが自分の苦難を振り返ってみると、そこには必ず、家族、友人、先輩や後輩、指導教員などの温かい支援や助言があったはずで、それらの人たちへの感謝の思いを今一度自分の胸に刻み付けて、これからの人生の糧にさせていただきたいと思います。

皆さんの大部分は就職し、社会に巣立って行くわけですが、大学卒業は人生の大きな節目であり、未知なる新しい社会への船出でもあります。この節目にあたって、いま自分がなすべきことは何かを考え、目標をしっかりとって努力すること、このことをぜひ肝に銘じて下さい。また、375名の卒業生は大学院に進学し、勉学活動を続けることとなりますが、大学院に進学することも社会に巣立つのと同じように、大きな節目であります。大学院では学部での勉学と質的に違う深い研究能力と広い領域の知識の修得が求められます。社会に巣立つにせよ大学院に進学するにせよ、学ぶ姿勢を常に堅持し、これまでに培った「知の力」をさらに向上させて頂きたいと思います。

多くの識者が指摘しているように、今日の人間社会は産業社会から知識基盤社会へ移行しつつあります。知識基盤社会とは、「新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会」のことです。このような社会においては、既存の知識を学ぶことよりも、自分で問題を見つけ、その解決に向けて自分で学ぶこと、すなわち、課題解決型の主体的学習・能動的学習がより重要になります。皆さんもすでに数多く経験していると思いますが、単に見たり聞いたりしただけではなかなか知識は身につくものではありません。相手に質問したり、相手と議論を戦わせたりすることによってはじめて理解が深まります。そして、さらに

誰かに教えることによってその知識が確実なものになります。すなわち、新しい知識を本当に自分のものとするためには、質問したり、議論したり、教えたりする仲間の存在が不可欠です。

仲間の存在は実社会に出たとき特に重要になります。実社会では、チームをつくって仕事をするが多くなります。チームでの共同作業、すなわちチームワークです。ここでは、チームのメンバーがいろいろな意見やアイデアを出し合って、最終的にひとつの合意を形成していく機会が多くなります。チームワークにおいては、一人ひとりの能力に限界があっても、多様な知識や技術をもった人たちが相手のことを尊重しながら自由に考えを出し合い、徹底的に話し合うことによって、当初誰も気づかなかった新しいアイデアに到達することがあります。これがこれからの時代の「知の創造」です。皆さんの中には、知的創造は才能に恵まれた個人が独力で成し遂げるものだと考えている人も多いと思いますが、実際には多くの場合、人と人との関係性のなかで知的創造が生まれます。ある人は「知とは他者との関係性のなかでつくる資源」だと言っています。このことをぜひ認識していただきたいと思います。

さて、我が国では1990年代初頭のバブル経済の崩壊以降、デフレに陥り、経済の低迷が続いており、「失われた20年」と言われています。このまま景気回復が起こらない場合、さらに「失われた30年」になってしまう可能性もあるという声もあります。安倍新政権になって、デフレ経済を克服するための大胆な金融緩和措置を講ずるという金融政策、いわゆるアベノミクスが導入され、世の中の雰囲気が少し変わり円安・株高などの効果が生まれています。しかしこの政策が長期にわたる好循環の経済成長をもたらすかどうかはまだ定かではありません。

日本の将来にはいくつか大きな不安材料があります。その不安材料のひとつが、主要国のなかでいち早く少子高齢化が進行し、「人口オーナス」の時代に入っていることです。皆さんは人口オーナスという言葉聞いたことがあるでしょうか？ 人口オーナスとは、人口全体に占める働く人の割合の低下が経済発展にとって重荷となった状態を指します。オーナス (onus) は英語で重荷や負担を意味します。それに対して人口ボーナスは逆の意味で使われます。ボーナスとオーナスの語呂合わせです。人口オーナス期には、高齢者の割合が高いため医療や介護などの社会保障費などが増大し、貯蓄率が低下し、ひいては投資率が低下して、経済成長に悪い影響を与えます。日本の人口オーナス期はこれから数十年続きますが、その期間にこれまでと同じ生活水準を維持し、それをさらに高めていくためには生産性の上昇がどうしても必要になります。そのためには、教育などによる人的資本の強化、そして何よりも技術革新（技術イノベーション）の推

進が重要な課題になります。今後、新たな技術イノベーションによって産業力を強化できるかどうかによって、我が国の命運が決まると言っても過言ではありません。

それではその見通しはどのようなのでしょうか？ 私自身は日本の技術イノベーションの将来に関してあまり悲観的になることはないと思っています。我が国は長い歴史のなかで独特の文化を築いてきました。そして、その文化を基盤として、欧米以外の地域で最初に近代化に成功し、その過程で多くの独自の技術やノウハウを蓄積して、「日本の強み」を形成してきたという実績があります。日本人は他の国と比較してとかくおのれの弱点や欠点を必要以上に意識し、悲観的になる傾向があります。つい先日の新聞記事でも、日本を熟知した外国の大使が「日本は世界第3の経済大国なのに、なぜこんなに悲観的なのか」という感想をもらしたことが紹介されていました。いま、私たちに必要なのは、「日本の強み」を正しく認識し、その特長をさらに伸ばしていくよう努力する前向きの姿勢だと思います。

日本の現代の産業技術には、私たちが想像する以上に古くから引き継がれてきた伝統技術の特性や方法論が採り入れられ、それが「日本の強み」を形成しています。例えば、日本で伝承技能として屏風や仏壇・仏具などに用いられる金箔の技術があります。金に銀、銅を加えた合金を、1万分の1ミリというきわめて薄くまで打ち延ばすそのノウハウは、現在、携帯電話の折りたたみ部分に欠かせないフレキシブル基板として用いられています。また、高知の土佐和紙は千年以上前から生産されていますが、その特徴は電気を通さず、薄くて丈夫なことです。その特性を活かして、現在では電気絶縁用セパレータとしてテレビやパソコンだけでなく、ハイブリッドカーや風力発電にもなくてはならないものです。これらはほんの一例ですが、このような伝統技術が現代の産業技術に活かされている事例は数え上げるときりがありません。

また、日本人の感受性や国民性が良く表れているものとして、感性志向の製品開発が挙げられます。例えば、トイレの温水洗浄便座は日本ではずいぶんと普及していますが、これほどまでにトイレが進化した国は世界中どこにもありません。これは日本人が清潔好きなのに加え、トイレが「用を足すところ」から「快適に過ごす場所」に進化したからでしょう。このような分野は最近「ヒューマン・テクノロジー」と呼ばれています。「ヒューマン・テクノロジー」とは「心の安らぎ、快適性、使いやすさ、健全性などの人間的要素に着目した技術」という意味です。この分野はきめ細かな技術を有する日本の得意とするところですが、他にも、良く知られているように、「環境」や「安全・安心」に関する日本の技術やシステムは世界に冠たるものがあります。

このように技術イノベーションに関する「日本の強み」は決して見捨てたものではありません。それどころか、その潜在力はアジアのなかではまだまだ群を抜いていると言

ってよいでしょう。戦後の復興期や高度成長期に「日本の強み」を形成できた大きな要因は、ひとつの目的を達成するために現場で働く人々が一体となり互いに協力しながら作業を行ったことです。すなわち、現場でのチームワークがうまく発揮されていたということです。先ほど申し上げたように、チームワークがうまく機能すれば、一人ひとりがバラバラで成し遂げるよりもはるかに多くの成果をあげることができます。日本には元来チームワークによって組織の力を高めてきたという実績があります。いま、それが個人主義や極端な成果主義などによって弱まっているのであれば、チームワークの回復も日本のこれからの課題です。

皆さんのような若い人たちが、これからの新しい日本の社会をつくる担い手です。これからどの道に進むにせよ、誰しものが組織の一員になります。その時に皆さんがチームワークを発揮する担い手になって、組織の力を高め、ひいては国の力を高めてくれることを期待します。

皆さんが、将来それぞれの分野で活躍され、日本および国際社会の発展を牽引するリーダーとなることを祈念して、門出にあたってのはなむけの言葉といたします。